
いざ往かん、第二生徒会 5

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いざ往かん、第二生徒会5

【Nコード】

N8689G

【作者名】

羽賀

【あらすじ】

御堂をはじめとする第二生徒会の面々。今日もまたのんびりと放課後を過ごす皆は、第二生徒会と提携しているゲーム開発同好会が持ってきたゲームをプレイする。第二生徒会シリーズ第五弾。

「今日も、暇だな」

「ええ、非常に……暇ですな」

「あ、あのつ、霧島先輩っ！ ぼ、ボクをお嫁さんにしてくださいっ！」

「はるかちゃん……。君の気持ちは嬉しい……。けれど」

「そんな……。ボクじゃ、ダメなんですか……？」

放課後、第二生徒会室。いつものようにだらりとした雰囲気の中、俺こと御堂は、ぐったりと顎を机の上に乗せていた。正面に座るは我が後輩美水。こいつもまた暇そうに、その手に握るルービックキューブを弄くっていた。そして俺の背後には『ボクっ娘』の役に入り込んでいる演劇少女天宮はるか、我が校でその名前を知らない女子生徒はいないと噂される、クラスメイトにして全校男子生徒の敵、『ミスターハーレム』こと、霧島冬哉がいた。二人は、天宮の更なる演技の幅を広げるために、寸劇を行っているらしい。彼らの台詞を聞き流しながら、俺は美水の弄くるルービックキューブを見つめていた。細い指が、せわしなくキューブの表面を動いて行く。く、俺も弄くられたい！

「お断りします」

「もう何度目かわからないけど、天井だから言わせて貰う。人の心を読むな」

これ以上心の内を読まれるのも糺なので、俺は意識を美水から後ろの二人に向けた。

先輩に恋する後輩ボクっ娘少女と言う、なかなか美味しいシチュエーションの寸劇だ。ていうか二人とも本気で会話しているように見えるのだからすごい。

「……はるかちゃんの気持ちはすごく嬉しいんだ。これは本当だよ」
「だったら……ボクを先輩のお嫁さんに……」

「違うんだよ、はるかちゃん……。僕はね……」

大仰なポーズで、霧島が天を仰ぐ。随分と様になったポーズだ。イケメンは死ねよ。

「……男の子が、好きなんだ」

「そんな！」

霧島先輩の告白に、シヨックを受けるボクっ娘。演技とはいえよくこんな台詞を言つてのけると思うかもしれない。だがこれは嘘偽りない霧島の本心である。霧島冬哉は男が好きなのだ。

そして、そのとぼつちりを受けるのは

「僕はもう、心に決めた人がいるんだ……」

「おいこつちに近づくな」

「そ、そんな……。御堂先輩が……。霧島先輩の思い人……!?!」

「ああ、そうさ……。僕はもう、彼なしでは生きて行けない」

「おいこら腕を首に回すな」

「だ、ダメ、霧島先輩！ ぼ、ボクを……。僕だけを見て！」

「すまない、はるかちゃん……。御堂君、さあ、優雅で隠微で甘いインモラルな世界に飛び立とう」

「誰が飛び立つか誰が！ っていうかなんで天宮との演技が最終的に俺との絡みになってんだよ！」

非常に爽やかステキな笑みを向けてくる霧島に俺は吼える。そしていい加減抱きつくのやめれ。

「これが世界の望んだ結末さ」

「俺はこれっぽちも、ミクロン単位たりとも望んじやいねえっ！

俺はノーマルだ！」

「だがそんな君を僕色に染め上げるのも……。悪くはない。ちなみにミクロンは距離単位さ」

「悪いわっ！ おい美水、コイツ止めてくれ！ そして俺の勘違いは謝ろう！」

勝手にトリップしだす霧島は俺だけでは手に負えない阿呆だ。どうにもならないので、美水に助けを求めることにした。

「……先輩、念願の恋人が出来たようで。うらやましい限りです」
「それは皮肉か、それとも馬鹿にしてんのか？ 俺は女の子が好きなんだ！ 何をどう間違っても霧島を好きにはならない！ なぜなら男だから！」

「それはつまり、僕が女装をすれば万事解決と言っことかな？」

「てめえは話をややこしくさせるんじゃないやねえよっ！」

屈託のない笑みを見せる霧島に、俺はどうもペースを崩されてばかりだ。

ため息を吐いて、もう一人の後輩である天宮に助けを求めることにした。

「天宮、助けてくれ」

「……これも私の演技の幅を広げるため。どうぞ好きなだけ隠微に絡み合ってください！」

「天宮お前……。鼻血拭けよ」

何故コイツは鼻血を出すんだ。どこに鼻血を流す要素がある！？
「男性と男性が隠微に絡み合う……そのようなシチュエーションに、女性というものは得てして弱いものです」

ルービックキューブを弄くり終えたのか、肘を立てて手を組み、その上に顎を乗せた美水が呟く。こいつまた俺の心を読みやがった。しかしまあ、随分と様になったポーズだ。

「わかったような口だな美水。お前もそうなのか？」

「いえ。私にはその魅力がいまいちわかりません。が……お遊びはそこまでいいでしょう、霧島先輩」

「なんのことだい？」

「そろそろ御堂先輩から離れるべきではないかと思ひまして」

「どうしてかな？ 僕は君に、迷惑をかけているわけじゃないよ」

「はい。それは重々承知しています。が、先輩方わけを見ていると理由もなくイラつくんです」

美水の不機嫌オーラに当てられたのか、霧島がしぶしぶ俺から離れた。助かったぜ美水さん。

「可愛いね、美水さん」

「は？」

「嫉妬だろう？」

霧島がニコニコと笑いながら美水を見つめている。

「……………いえ全くこれっぽっちもどこにも全然一切合財霧島先輩に嫉妬する要素がありません」

「とか言いながらどうして俺の事を踏んでるんだ、なあ美水!？」
ダメだ、こいつの行動が俺にはまったくといっていいほど訳わかんらん。

美水にゲシゲシと踏まれつつ、ちょっと嬉しかったりする自分が変態なのではないかと少しブルーになっていると、入り口の扉が開いた。

「やつほー。遊びに来たよー」

姿を現したのは、第二生徒会の敵とも言える、単なる生徒会のトップ、生徒会長の羽佐間杏子^{はなすけ まなこ}。彼女の動きに追随する、もう既に別の生き物といっても過言ではないポニーテールが特徴的な、俺の憧れの人物である。って美水、何故俺を踏む力が強まっている！

「なんだか腹が立ったので」

「いや意味わからん」

「御堂君？ どうして恍惚とした表情で美水さんに踏まれてるのかな？」

「いや、色々あってな……………」

「それよりも、会長こそどのようなご用事……………で！」

「ああっ！ 強いっ！」

美水の一撃は、俺の背骨を伝わって、体全体に広がっていく！
これは、イイ！

「せ、先輩の顔がひどいことにつ！」

「はるかちゃん……………君にはこの顔の魅力がわからないのかい？」

「わからないしわかりたくもないですよっ！」

天宮と霧島の随分失礼な会話が聞こえてきたんだが。まあいいや。

ちなみに、顔を合わせたらいつも険悪な雰囲気に入する美水と羽佐間は、今日も例外なく睨み合っていた。

「……美水さん、その足を退けて」

「どうしてですか？」

「どうしても」

「理由になつてませんよ」

「だあああつ！ 何でお前らは顔を合わせたらいつも喧嘩ばかりしやがるんだ！」

「先輩のせいです」

「御堂君のせいだよ」

「こんな時だけ息のあつた二人が憎いつ！

ダブル罵倒にちよつと快感を覚えていた俺だったが、その意識はまたもや別の来客によって現実へと引き戻された。

バアン、とアホな位大きな音を立てて、吹き飛んで行く扉。そこに立っているのは、前髪で瞳が隠れてしまっている、背の高くて陰気な雰囲気な男だった。あれか、第二生徒会にやってくる奴らは、ドアを吹き飛ばさないと気がすまないのか？

「……出来たよ、御堂……出来たんだ……」

「あ、お前！ 誰かと思えば影の薄さには定評のある、ゲーム開発同好会の会長、安藤！」

「随分とひどい覚え方だな……否定はしないけど……」

ゲーム開発同好会は、化学技術研究同好会と同じく第二生徒会と提携している、マイノリティな部活である。その目的は、名前の通りゲーム開発。俺は近頃ゲームから遠ざかっていたので、彼らに特注のゲーム製作を頼んでいたのだ。

ふ、どうやら完成したらしいな。安藤の手には、一枚のCDが握られていた。

「約束の……RPGゲームだ。……ファンタジー物だが……登場人物は全員……東成高校の生徒だ……」

「おお、よくやってくれた安藤！ ゲーム製作の礼だ、部費を上げ

とくぜ！」

「……………頼むぞ……………ドリー クラブ、買わないといけないんだからな……………」

「安心しろ！ ちゃんと上げとく！」

安藤からゲームを受け取り、俺は笑顔で羽佐間に振り返った。予想通り、俺たちの間で交わされた勝手な会話に柳眉を逆立てている。

「ちよつと御堂君？ 勝手にそんな約束されたら困るんだけど」

「羽佐間」

「ちよ、ちよつと……………え、そんな、こんなところで……………」

俺はつかつかと羽佐間に歩み寄り、その手を取った。目が合う。

だがここで、目を逸らすわけには行かない。俺はじつと羽佐間を見詰めた。

明らかにうるたえ、頬を染めている羽佐間。その姿に多少の疑問を感じつつも、俺は真摯な態度で口を開いた。

「羽佐間……………。頼む、ゲーム開発同好会の部費を上げてくれないか？」

「う……………そ、その……………ううう……………」

「ダメか？」

「え、でも……………そういうのは、勝手には……………」

「……………頼む、羽佐間……………俺からのお願いだ」

「……………わ、わかったよ……………。もう……………御堂君の頼みだから……………、特別なんだからね……………」

「……………ありがとう、羽佐間！」

「え、うん、って、ひゃううっ！？」

俺は最後の仕上げとばかりに羽佐間に抱きつく！

ははは油断しやがって羽佐間め！ こうして真摯な態度でお願いしていると思わせつつ、俺は抱きつく隙をうかがっていたに過ぎん！ ああ、なんていい匂いがするんだ女の子って！

……………鉄拳の一つや二つ飛んでくるかと思っていたのだが、おかし

い。飛んでこない。

その代わり、顔を真っ赤に染めた羽佐間が、俺の胸あたりで縮こまっていた。うひゃ、可愛い　ぶへあっ!?

「不潔です、御堂先輩」

「先輩、羽佐間先輩と美水先輩にはそんなことばかりで……。私は魅力がないんですか？」

「御堂君には僕がいるというのにつ！」

三者三様、鉄拳制裁をいただきました。が、最後のお前、お前はどっか行きやがれ。

「よし、じゃあ早速プレイするかー」

部屋に置いてあるパソコンに、安藤から貰ったCDを突っ込む。

インストールが開始され、デスクトップに現れたアイコンをダブルクリックすると、ウィンドウが開いた。

どこかで聞いたことのあるようなテーマ曲が流れ、タイトルロゴが現れる。『T O S E I Q U E S T』……か。

「略してとーきゅーですね！」

「TQ位だろ、普通」

ディスプレイを興味津々に覗き込んでいた天宮に突っ込みを入れ、俺は『はじめから』を選んだ。

画面が暗転し、メッセージウィンドウが現れる。

『時は戦国、東成大陸は激動の時代を迎えようとしていた……。大陸の覇権を争い、生徒会帝国と、御堂公国が全面戦争に打って出たのだ。この戦いは、国力で劣る御堂公国の敗北によって幕を閉じると思われたが、だがそれは違った！　御堂公国軍に、獅子奮迅の働きを見せる部隊が一つ……。独立遊撃部隊、通称霧島小隊！　この物語は、霧島小隊の戦いの軌跡を描いたものである……』

「……ありがちですね」

「ありがちか？　ていうか霧島かよ隊長」

「当然パートナーは御堂君だろう？」

「謹んでお断りするぜ」

もう一度メッセージウィンドウが現れる。

『……というのは嘘である』

「嘘かよ！」

何か戦記物っぽいから少しおかしいとは思っていたが！

『これは、勇者羽佐間が、魔王を倒すまでの冒険の軌跡を描いたものである……』

「え、私が主人公なの？」

「妥当な線だろうね。羽佐間会長は男女問わず人気が高いから」

「そ、そうなの……？」

視線で、俺に「そうなの？」と尋ねてくる羽佐間。可愛い！思わず抱きしめたくな

「ぎゃあっ！」

美水に足を踏み抜かれました。

ディスプレイに表示された勇者羽佐間の姿は、やけに完成度が高かった。美少女が鎧着てるってのはやっぱりいい。

「すごいな……。羽佐間の美少女っぷりを完璧に再現してやがる」

「ゲーム研究同好会って、絵師さんがいるんでしょかね？」

「さあな……。よし、王様から魔王討伐の任は受けた。酒場で仲間補充しようぜ」

「おー！」

「……って、ノッてるのは天宮だけかよ！」

俺は背後の三人を見やる。

「僕としてはBL風味学園ADVがよかったかな」

「私は音ゲーとかがよかったな……。主人公なんて恥ずかしいし……」

「ゲームはやらないのでわかりませんが……テトリス位なら出来ます」

三者三様、そして霧島お前は黙れ。

「これは東成高校の生徒をモデルにしてる、内輪ネタ作品だから……、羽佐間だけじゃなくてお前らも出てくるはずだぞ」

そう言っているうちに酒場に到着。マスターに話しかけると、仲間になってくれそうな人物のリストが出てきた。

「ご丁寧にクオリティ高めグラフィック付きだ。」

「ほう、霧島は僧侶か……」

聖職者の服を着て、頭にも十字が描かれた帽子を被っている霧島がディスプレイに映し出される。

爽やかな笑みは相変わらずで、憎たらしい。が、回復役がいなければどうしようもないので、仕方なく仲間に加えることにした。

「次は……天宮か」

「うわあ！　すごい、可愛い衣装ですね！　こんなに可愛く書いてもらえるなんて、嬉しいです！」

「まあ元が可愛いしな」

「……………」

「どうした天宮」

「……、先輩は、不意打ちが好きなんですか？」

「なんのこっちゃ。」

ひらひらリボンを衣装につけている天宮は、どうやら踊り子らしい。うん、イメージ的にはぴったりだ。

可愛いので仲間に加え、次に現れたのは……、

「わ、私ですか……？」

「美水だな。魔道士だと」

黒い魔女服に身を包み、形が特徴的な帽子を被っているその姿は、美水自身の放つオーラとぴったりフィット。はまり役だ。

「当然仲間に加えて……あれ、俺がない」

「あ、ホントだね。御堂君がないや」

「くそ、安藤め……俺は入れ忘れたとでも言うのか？」

パーティが四人と満杯になったので、俺はしぶしぶ酒場を出て、魔王城へと向かうことにした。

俺はきつと隠しキャラとか、そういう類なんだ違いはない。目から溢れてきているのはきつと汗だよ、うん。

「案外魔物だったりして」

「美水、悲しいことを言うな……」

街を出て少し経つと、画面暗転。敵とエンカウントしたようだ。

画面中央に現れた敵の姿は、白衣を身に纏い、怪しげな笑みを浮かべる上村かみむらだった。随分と敵役が似合っている。

「羽佐間の攻撃、生徒会スラッシュユ！」

「な、なにそれっ！」

「霧島の爽やかスマイル！ 天宮のジョブチェンジ、武闘家！ 美

水の冷たい微笑み！」

『たたかう』コマンドを押せば、パーティの面々が個性豊かな技を放つ。全部モデルの人物の性格とかに即しているようで、なかなか面白い。気づいたら戦闘が終了していた。

どうやら雑魚敵らしく、何度も何度も湧いてくる上村を屠りつつも、勇者羽佐間は魔王城にたどり着こうとしていた。

「早くないですか、展開」

美水が呟く。

「まあ所詮は同人ゲームみたいなもんだし、グラフィックとか戦闘に力入れているみたいだから仕方ない」

そんな彼女に、俺は目から血の涙を流しつつ答えた。なぜなら、羽佐間、天宮、美水の三人から目潰しを食らったからためだ。視界が紅いぜ。

このゲームはやけに凝っていて、ダメージを受ければ受けるだけ着ている衣装が削れて行くという、なんとも男の子に優しいゲームだったのだ。俺はパーティメンバーの体力を減らすべく雑魚と戦いまくっていたのだが、途中でその真意に気づいた三人に制裁を食らってしまった。畜生め。

「あ、城門に敵がいますよ先輩！」

「ああ、雑魚敵を倒しまくったパーティーメンバーの平均レベルは八十！　いてこましちやる！」

『城門の主が現れた！』

メッセージと共に、出てくるグラフィック。こ、これは　！

「うわぁ……すごい、美人さんですねー」

「凜とした方の方のようですね」

「これは、誰だったかな……？　僕には見覚えがあるような感じがしてならないのだけれど」

「風紀委員長の御堂紅先輩だね……。あれ、御堂？」

羽佐間の呟きで、全員が一斉に俺を見る。いや、俺は関係ないっすよ？　いや、本当に……。

「怪しいですね」

「さぁ、とつとと倒そうぜ！」

美水の胡乱げな視線から逃げるように、俺はパーティーメンバーを操作、難なく城門の主を倒した。

よし、城内に突入だ！　……って、俺が出てませんよ！？

「所詮御堂先輩は御堂先輩ってことですね」

「くおっ、こうなりや美水一人だけでバトルだうははははは！」

「あ、ちよ、ちよっと！」

「下着まで来たぜははははは！　このまま一糸纏わぬ姿にしてやげはあっ！？」

「……自業自得です」

美水の踵落としが頭に入り、俺は美水アーマーブレイク計画を諦めざるを得なくなった。

が、めげないぜ！　ずんずんとパーティー一行は魔王城を進んでいく。

仲間を一人差し出さなければ開かない扉では問答無用で霧島を生贄に捧げ、

「あ、御堂君それはひどい！」

敵の魔法使いに操られてしまった天宮をアーマーブレイクし、

「み、見ちゃダメですっ！」

美水に出すコマンドを『かばう』だけにして、ギリギリまでアーマーブレイクさせたり、

「……先輩？」

まあそんなこんなで、勇者羽佐間一行は魔王の座る玉座に辿り着こうとしていた。

既にこちらのHPもMPもゼロに近い。これでラスボスに挑むのは無謀かもしれない……。

「あ、セーブポイントがありますよ！ 回復の泉も！」

「よし入るぞ！」

回復の泉に入り、全ステータスを最大値まで回復。よし行くぜ、ラスボス！ 待っている、倒してやる！

『よく来たな、杏子。そんなに俺たちに会いたかったのか？』

『君の愛は、僕が受け止めよう』

『おい竹元お前』

『早い者勝ちだよ、沼口』

玉座の間に入った勇者一行を迎えたのは、生徒会の馬鹿二人組、正男君と愛美ちゃんだった。

ていうかゲームの中でもこんなノリなのかい。

「いつぞやの生徒会二人組ですか……」

美水が呆れたように呟いた。天宮も、呆れた表情でディスプレイを見ている。

『おや、御堂がいないね』

『ふん、俺たちにビビって逃げたんだろ』

『ははは、そりゃ傑作だよ沼口！』

『だな！』

「こ、こいつら……というかゲーム開発同好会iiiiiiii！ 俺

を日々そんな目で見てやがるのかあああああああ！」

「人をよく見ているようですね」

美水の言葉が、グサリと胸に突き刺さる。相変わらず俺は出てこないしよお！

「くそつ、こうなったら徹底的に正男君と愛美ちゃんに痛い目見せてやる！ バトル、スタートお！」

ボス線特有の音楽と共に、最後の戦いが始まった。

羽佐間一行のレベルは八十以上、余裕綽々だ……と思っていたのだが。

「くそ、何だこいつら、毎ターン体力回復しやがる！」

馬鹿二人組、攻撃力は貧弱だが、回復力が半端じゃない。ダメージを与えても、それ以上体力を回復されて、堂々巡りになってしまふ。くそつたれめ！

「これはあれか、あいつらがしつこいということを暗喩しているのか！？」

「違うと思いますが」

「羽佐間は生徒会スラッシュ・改、天宮はジョブチェンジャンデレ少女（チェンソー装備）、霧島は全体回復魔法、爽やか投げキッス……美水は……なんだこれ？ 召喚？ こんなコマンドあったか？」

「記憶にはないです……」

俺は振り返って天宮に問うた。天宮は首を振る。

「まあ何でもいいや、召喚んんっ！」

ターン開始。羽佐間が、天宮が、霧島が行動を終え、二人組の攻撃。弱い弱い、大したダメージを与えることなく終了。そして最後に召喚コマンドを選んだ美水が動き出す

『憎悪の空より来たりて、正義の怒りを胸に、我らは魔を断つ剣を執る！ 汝、無垢なる刃』

「つてえ、これは危険だろ！」

『御堂！ 召喚！』

「ここでのなのかあつ!? そして俺召喚獣扱い!?」

つつこみをよそに、画面上に現れた俺! うひゃ、何か機械のアーマー纏ってるよ格好いい!

「すげえ、かつこよくね、俺!」

「いいから早くボスを倒してはいかがですか」

「そうだったな……よし、御堂の攻撃! 催涙スプレー……って、なんでだよ! 腕についてる刀とかキャノン砲は飾りか!？」

「……先輩の人間の小ささをあらわしているんですね」
「黙れよあんたはもう!」

必殺技も何もない自分の姿に涙しつつ、俺はコマンドを入力していく。どうやら俺は催涙スプレーしか使えないらしい。が、ボスの毎ターン体力回復効果を封じることが出来るらしく、結局難なくアホ二人組を倒し、平和を取り戻すことに成功したのだった。

「なんか、釈然としねえ……」

エンディングのスタッフロールが終わり、タイトル画面へと移行する。

はじめから、つづきから、おわりからのコマンドの下、エクストラモードと書かれたコマンドがある。

「押してみるか」

「おわりからに対する突っ込みはないんですね」

あ、エクストラモードが始まった。

ぴちゃ、ぴちゃ、と水が滴るような効果音が聞こえてきて、ディスプレイに映し出されたのはあられもない姿を晒したパーティメンバーたちだった。全員が全員、恍惚とした表情で、何か、モザイクの、かかった、物を、ですね……、

「いやああああっ!」

「こ、これはダメですよっ!」

「先輩、今すぐ消してください……」

「わ、わかりました!」

まさかクリアした後にはプレイできるのがエーゲーだとは。

俺は急いでマウスポインタを動かして、右上の×印をクリック。しようと思っただけ……、

「な、何でフルウィンドウにしているんですか！ 確信犯ですか！？」

「ち、違う、手が滑ったっていうかお願いだから信じてくれ！」

「信じられません！ 今日こそ先輩には引導を渡さなければならぬいようですね、覚悟してください！」

「ちょ、ま、お前待って頼むから、おいやめる、それは椅子だぞ、

おい！」

「御堂先輩の……馬鹿ああああ！」

俺が最後に見たのは、超速度で顔面に迫り来るパイプ椅子だった。

ふ、いつもこんな目に逢うんだな、俺って……。

「僕はこのゲームに微塵の魅力も感じないけどね」

「……それは霧島先輩がガチホモだからですよ」

「ははは、それもそうだね」

(後書き)

むちゃくちゃ眠いです、どうもこんにちは羽賀です。

色々あって第五弾、第二生徒会シリーズもここまで着きました。今回のメインはゲーム、ではなく御堂紅の存在です。彼女がいつたい、どのように物語に絡んでくるのか。何かを隠した風の御堂は？と、つまり御堂紅という人物に興味を持っていたいたくためのストーリーでした。

あれ、眠くて何が言いたいのか意味不明に……。

まあとにかく、次回の第二生徒会シリーズ第六弾をお楽しみに……。お読みくださった読者の皆さん、ありがとうございました……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8689g/>

いざ往かん、第二生徒会 5

2010年10月8日15時14分発行